

『財務会計システムの研究』

(税務経理協会、1999年8月) 興津 裕康 編著

『中小会社の計算公開と監査：各国制度と実践手法』

(清文社、2000年1月) 武田 隆二 編著

経営学部教授 河 崎 照 行

§ 1 プロローグ

企業活動のグローバル化や経済のソフト化が、会計制度を劇的に変化させている。例えば、連結財務諸表への重点移動、キャッシュ・フロー計算書の制度化、金融商品に係る時価主義会計の導入など、わが国の会計制度は戦後の制度生成期に匹敵する大改革が進行中である。このような時期に、筆者は、次の2つの共同研究に参画する機会を得た。

興津裕康 編著『財務会計システムの研究』(税務経理協会、1999年8月)

武田隆二 編著『中小会社の計算公開と監査：各国制度と実践手法』(清文社、2000年1月)

§ 2 『財務会計システムの研究』の概要

本書は、財務会計における「計算」と「情報」の問題を多角的に検討した研究書である。財務会計は、企業の経済活動を会計システム(計算システム)を介して会計情報に写像し、それを利害関係者に伝達する行為を総称する。この行為は、具体的には、複式簿記(計算システム)によって財務諸表(会計情報)を作成し、投資者など(利害関係者)に伝達する形で実施される。しかし、現行の複式簿記システムは、今日、会計情報の有用性(情報の役立ち)の観点から、必ずしも十分ではないとの批判を受けている。

本書は、このような問題意識から、複式簿記システム(計算システム)と会計情報の関係はいかにあるべきについて、多角的に考究したものである。本書は、19名の気鋭の研究者による共同論文であり、次の3部から構成されている。

第1部(財務会計システムの基礎)では、会計の計算構造(複式簿記)と情報システム(情報処理)のあり方が議論されている。

第2部(財務会計システムの展開)では、わが国会計制度の理論構造をなしているドイツ会計学とアメリカ会計学について、その変貌過程が浮き彫りにされている。

第3部(財務会計システムの模索と展望)では、リース、デリバティブ、年金、キャッシュ・フローなどの個別問題について、その制度化のあり方が議論されている。

§ 3 『中小会社の計算公開と監査』の概要

本書は、中小会社について、主要各国の開示・監査制度を総合的に検討した研究書である。わが国では、昭和61年5月に「商法・有限会社法改正試案」が公表され、中小会社監査（会計調査人調査）の道筋が示されたものの、未だ制度化には至っていない。しかし、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどでは、中小会社監査が「制度」として確立されており、EU各国でも制度化の動きが活発化している。この点、世界経済の先導的役割を担うわが国経済において、その制度化がみられていないのは奇異の感を免れない。

本書は、このような問題意識から、中小会社の開示・監査制度について、諸外国の制度と実践を浮き彫りにしたものである。本書は872頁からなる大著であり、次の2部から構成されている。

第一部（わが国における中小会社の「計算公開」と「監査」の課題と方向）では、わが国の中小会社の特質とともに、会計調査人調査に関する議論が総括されている。

第二部（各国における中小会社の「計算公開」と「監査」の制度と実践）では、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリア、オランダ、オーストラリア、ニュージーランドの9カ国について、中小会社の開示・監査制度の現状が文献的に浮き彫りにされるとともに、具体的な監査マニュアルが提示されている。

§ 4 エピローグ

新しい会計制度の解説書が専門書のベストセラーの上位にランキングされ続けている。それほど、会計制度の変革は、経済社会に大きな衝撃を与えている。上記の2つの著書は、わが国の会計制度の将来を理論的・実践的に展望した研究書である。会計研究者や会計専門職を志す人びとのみならず、ビジネスの世界に関心のある人びとにも一読を推奨したい。